

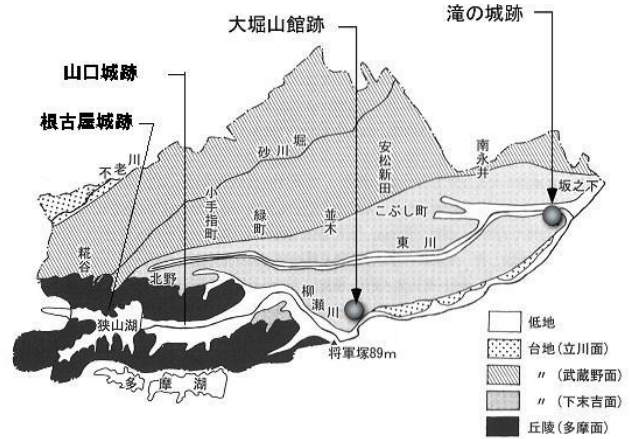
埼玉県指定史跡 滝の城跡

発掘調査概報

1. 位置と概要

滝の城は、所沢市の東部、東川と柳瀬川の合流点に築かれており、本郭・二の郭・三の郭の内郭と、それらを囲む外郭・出郭で構成される多郭式の平山城です。規模は、東西 350m×南北 200mほどで、城の南側は高さ約 25mの急崖、北側は三重の堀や土塁によって守られています。

内郭は、現在でも良好に遺構が残されており、大正 14 年（1925）3 月 31 日に埼玉県の史跡として文化財指定された市内で最古の指定文化財です。



2. 歴史と背景

滝の城は関東管領の山内上杉氏の家臣で、当時武蔵国比企・入間・多摩郡下に領地を有していた大石氏が 15 世紀後半に築いたと言われていましたが、最近では、それ以前に扇谷（おおぎがやつ）上杉氏が、古河公方に備えて整備した江戸・河越の 2 城を結ぶ「つなぎの城」として築城したという考え方も出てきています。

文明 8 年（1476）、関東管領山内上杉顕定の家臣である長尾景春が家宰（かさい：家長の補佐役）職を巡り、反乱を起こしました。それを扇谷上杉定正の家宰である太田道灌が鎮めたことから、管領家である山内上杉氏の権威は失墜し、扇谷上杉氏が台頭してきました。これを懸念した顕定は、文明 18 年（1486）、定正に讒言（ざんげん：他人を陥れようと事実を曲げて、悪しきざまに告げ口すること）して道灌を殺害させる事件が起こり、上杉氏同士の争い（長享の乱）が始まりました。この騒乱が伊豆・相模国で力を付けてきた北条氏の武蔵国進出を許す結果となり、大永 4 年（1524）に江戸城、天文 6 年（1537）には河越城が北条氏に奪われました。両上杉氏は和睦し、古河公方と組んで北条氏に対抗しましたが、天文 15 年（1546）の河越夜戦で敗北し、扇谷上杉氏は滅亡、山内上杉氏は上野から越後へと敗走、滝の城は北条氏康の三男である氏照の持ち城となりました。

その後、滝の城は反北条氏の太田資正がこもる岩付城への「境目の城」として番所が置かれ、前年に攻め落とした勝沼・辛垣（からかい）城（現・東京都青梅市）の旧三田氏家臣に輪番で警固させていたことが、永禄 7 年（1564）5 月に発給された「清戸三番衆交代命令状」（青梅市和田家文書）として残されています。同年 7 月、岩付城も北条氏に降り、さらに北への支配が進むと、滝の城は「つなぎの城」として、永禄 7 年（1564）～天正 5 年（1577）にかけての下野方面への出兵の際には、陣揃えの地になったと言われていました。『小田原編年録』1812 滝の城の外郭は、この時期に整備され、兵站基地として多くの兵が駐留できるように増設されたものと思われます。しかし、天正 18 年（1590）、豊臣秀吉による小田原攻めの際、浅野長政勢の北方からの攻撃を受けて、滝の城は一日で落城したと伝わります。『新編武蔵風土記稿』1830

なお、ここに述べた歴史と背景については、今後の発掘調査の成果や文献史学の進展で、より正しい事実が分かってくるものと思われます。

3. 発掘調査の概要

滝の城跡では、これまで民間開発に伴う緊急発掘調査を計 11 回、史跡整備を目的とした学術調査を平成 23 年度から計 6 回行っていきます。（4 ページ縄張り図の①～⑨が調査位置を示します。）

①障子堀(昭和 61 年度調査)

外郭と出郭を区画する部分において、クランク状の堀が 40m にわたり検出されました。堀の形状は、断面が逆台形の箱葉研堀で、上部幅 8～12m、底部幅 1.3～2.7m、深さ 5m、堀底は高さ 0.8～1.2mの低い畝（うね）で区画された障子堀でした。

ここは北条氏時代に大手口があったと考えられている場所になります。



障子堀

②障子堀(平成元年度調査)

外郭西辺にあたる部分において、堀が45mにわたり検出されました。

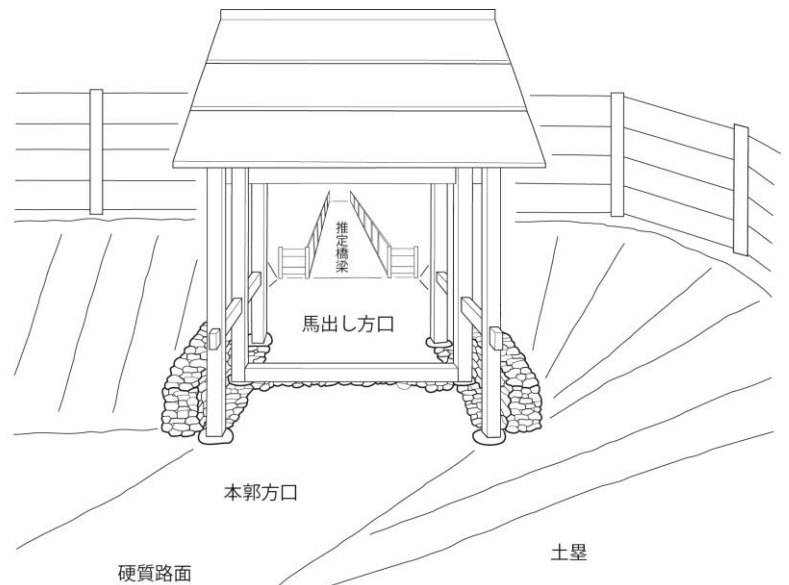
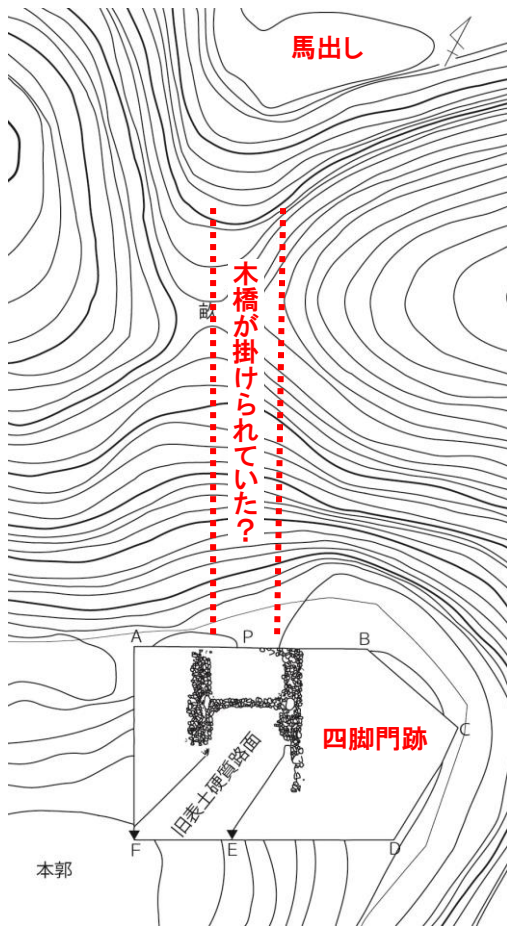
堀の形状は、断面がV字形の薬研堀で、上部幅10m、底部幅0.4~2m、深さ7m、底部は高さ1.4~2.5mの畝で区画された障子堀でした。



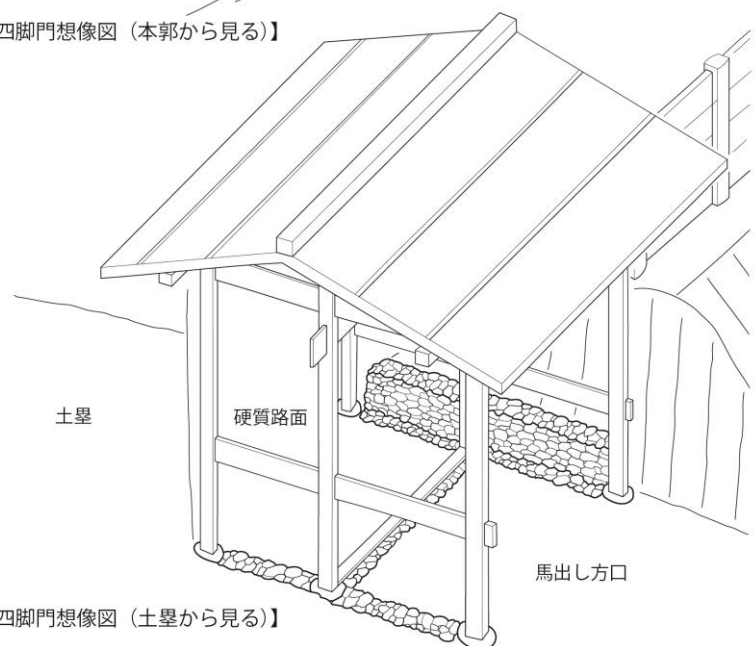
障子堀

③四脚門跡(平成2年度調査)

城山神社の社殿改築工事に伴い本郭の北半分で発掘調査が行われ、北東側の土塁の切れ目箇所から、H字形に礫を敷き詰めた四脚門跡の基礎が検出されました。地面に焼土が広がっていたことから、門は戦火で焼失したものと思われる。門の部材と思われる炭化材や角釘・飾り金具なども出土しました。さらに、四脚門跡の外側にある内堀がこの部分だけ土橋状に浅くなっていることから、対岸の「馬出し」に向かって木橋が掛けられていたと推察されています。



【四脚門想像図(本郭から見る)】



【四脚門想像図(土塁から見る)】



四脚門跡の基礎

④障子堀(平成16年度調査)

外郭の北東隅において、直角に折れる堀が検出されました。堀の形状は、断面がV字形の薬研堀で、上部幅 11~12m、底部幅 0.2~1.0m、深さ 6~7m、堀底は高さ 2m、幅 50 cmの畝で区画された障子堀でした。



障子堀

⑤地鎮祭祀跡(平成24年度調査)

二の郭の調査で、地山に方形の掘り込みがあることが確認されたため、郭面を大きく開けたところ、約 1.5 m×2.7mの長方形の土坑が検出されました。この土坑は、二の郭を造成する前に掘り込まれており、すぐに埋め戻されていました。また、土坑の周囲からは 4 本の柱穴が確認され、柱穴内からは「かわらけ」と貝殻(ハマグリ)、底面直上からは鋸(ノコギリ)が出土しました。この遺構は、二の郭の造成前に掘り、遺物を埋納したのち、すぐに埋め戻されていること、四隅に柱穴があること、大工道具である鋸が出土していることなどから、築城に伴う地鎮祭祀跡と推察されます。



長方形の土坑と 4 本の柱穴

柱穴内から出土した「かわらけ」

土坑の底面直上から出土した鋸

⑥門跡(平成24年度調査)

馬出しと三の郭の間を通る現在の遊歩道の位置において、1 列の石敷と 4 本の柱穴が検出され、炭化材と焼土が出土しました。炭化材は径 8~10 cmほどで焼失した門の部材と思われます。また、見込みに沈線渦巻きが施された「ウズマキかわらけ」が出土しました。「ウズマキかわらけ」は扇谷上杉氏関係の城館跡で多く出土しており、16 世紀前半~中頃の時期に比定されています。「ウズマキかわらけ」はこのほかに本郭や中堀でも出土していることから、滝の城はこの時期、扇谷上杉氏の支配下にあったと考えられます。



門跡の石敷

炭化した門の部材

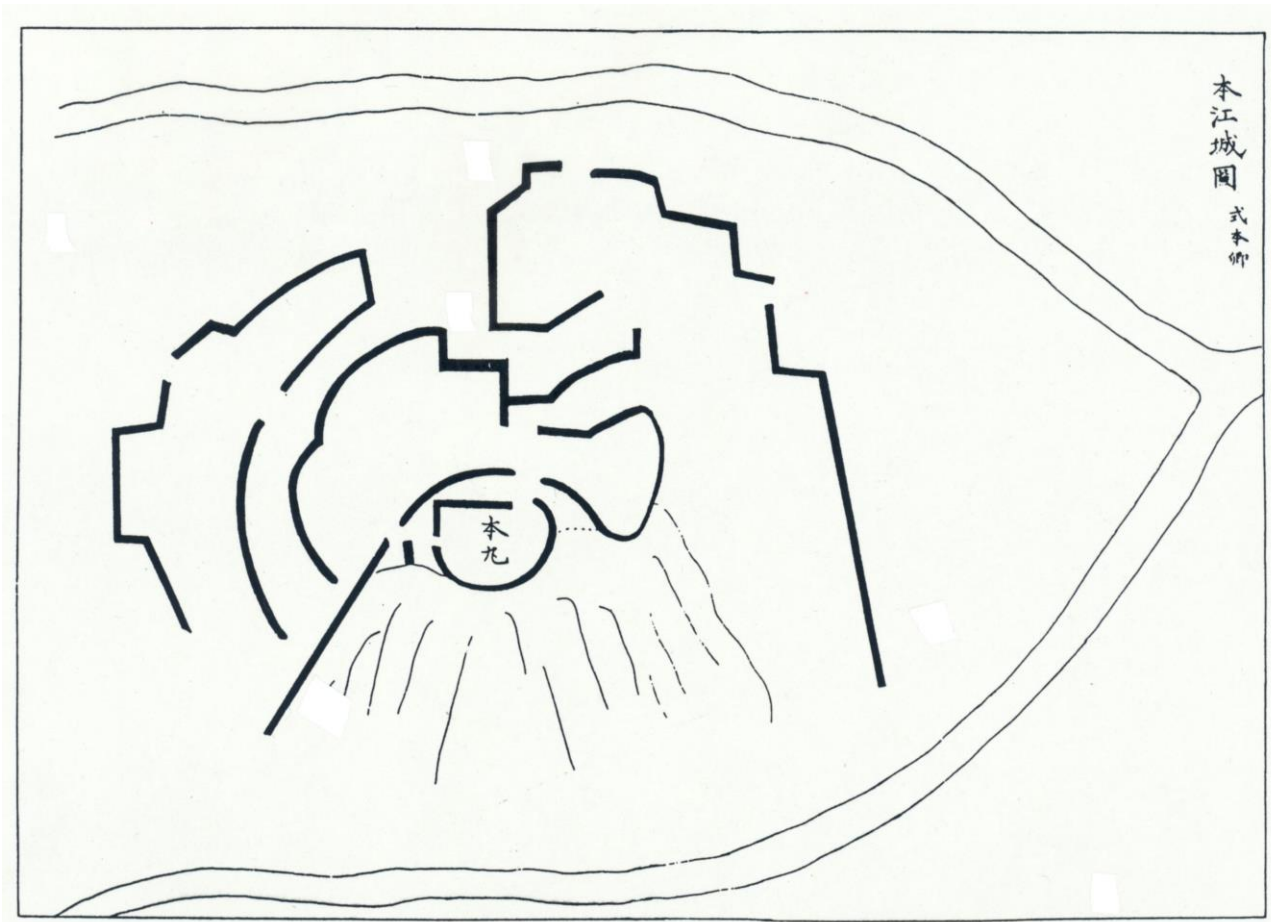
ウズマキかわらけ

⑦大井戸跡(平成24年度調査)

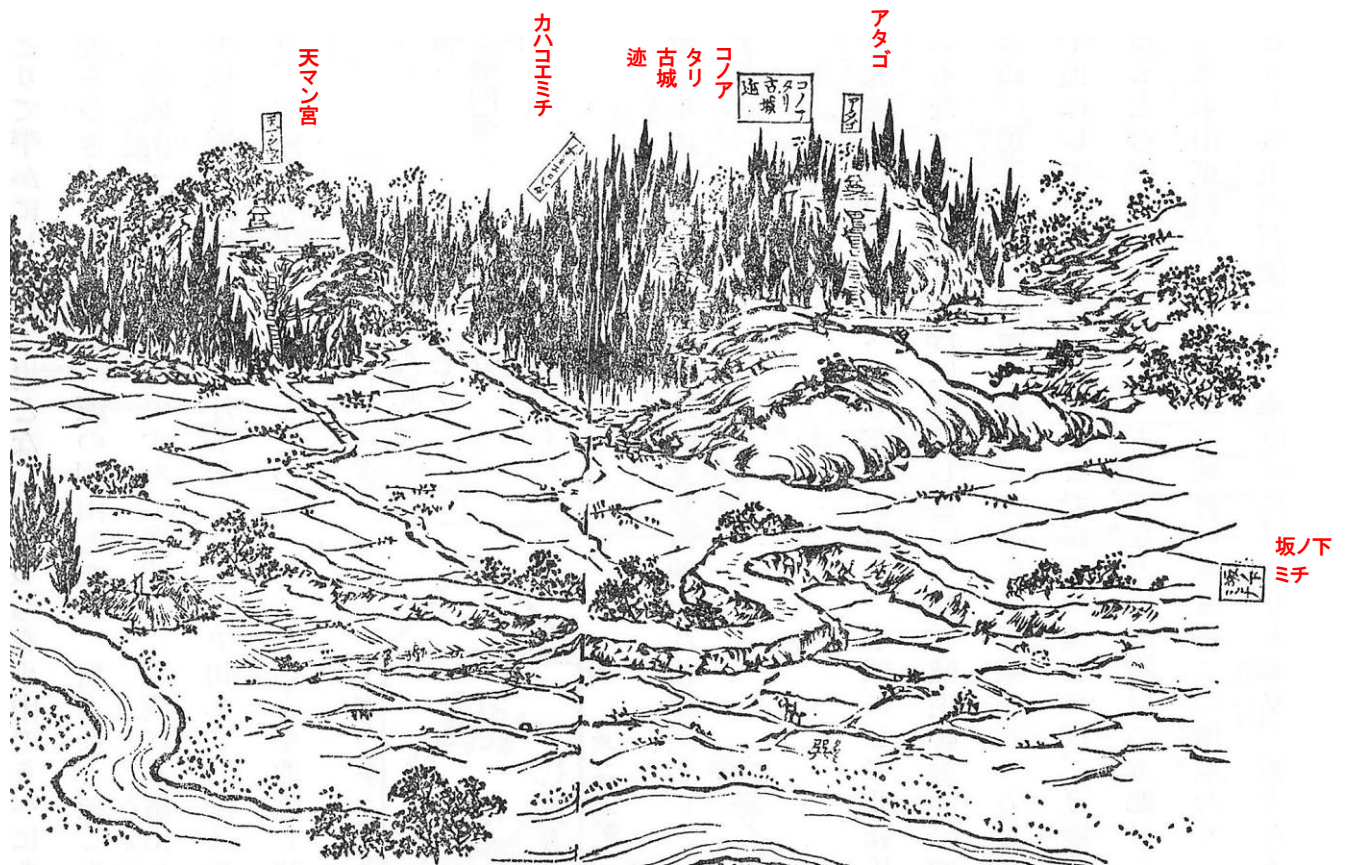
三の郭の不自然に凹んだ箇所を掘り下げたところ、径 10mの漏斗状で西側に 6 段の階段を伴う井戸跡を検出しました。この井戸跡は、深さ 8.5mのところまで掘り下げましたが、底部まで達することはできず、安全上の観点から調査終了としました。三の郭は標高が高いため、水の出る深さまで掘るには相当深く掘らなければならず、四方に堀がまわり水脈も絶たれていることから、堀と同等またはそれ以上の深さまで掘らないと水は出ないと考えられます。もっと低い所で掘れば簡単に水は出るのですが、それでは敵に水の手を抑えられてしまうため、城の中心近くに井戸が必要だったものと推察されます。

滝の城跡 縄張り図





『小田原編年録』(本江城図) 文化9年(1812)刊行 滝の城の縄張りを描いたものと思われます。



『武蔵野話 続編』(城村) 文政10年(1827)刊行 「アタゴ」と書かれている所が滝の城の本郭と思われます。



不自然に凹んだ箇所



大井戸跡



6段からなる階段

⑧障子堀(平成28年度調査)

大型土塁 1 と 2 に沿って堀が検出されました。

堀の形状は、断面が逆台形の箱葉研堀で、堀底は高さ 70cm の畝で区画された障子堀でした。

堀の法面は、45 度から 60 度に角度を増して落ち込んでおり、全てハードロームがむき出しで、手掛かりや足掛かりの一切ないツルツルの状態になっています。

堀の下層には締まりのないローム粒子主体の土、中層には黒色土とロームブロックの混合土が雑に入れられた感があり、人為的に埋め戻された状態でした。また、上層は自然堆積の様相で近世の遺物が出土しました。



障子堀

⑨中堀(平成29年度調査) (4 ページ縄張り図の①～③が調査位置を示します。)

①大型土塁 1 と 2 間の鞍部には、前記の障子堀の延長が入り込んでいました。平滑なスロープが鞍部に向かって上り、鞍部に高さ 70cm の畝で仕切りを設けて、さらにその先は中堀に向かって緩く曲がりながら落ち込んでいました。



調査前の大型土塁 1 と 2 間の鞍部



大型土塁 1 と 2 間の鞍部の畝



中堀に曲がりながら落ちている方向を望む

この障子堀の延長は中堀の上部に接続していました。中堀は急傾斜で落ち込み、深さ 4mの礫層にまで達していました。また、堀底には礫層をくり抜いて小さな障子が造られていました。



障子堀(奥)と中堀(手前)



急傾斜で落ち込み礫層まで達する中堀



堀底のミニ障子

②南北の中堀を「T」字形に掘り下げたところ、箱薬研堀が検出されました。堀底に畝はなく、ほぼ平滑で深さは約 4mを測りました。また、堀底から約 3mの付近には、後から法面を開削して構築した犬走り状のテラスが回っていました。堀はテラスが見えなくなる所まで人為的に埋め戻されており、さらにテラスからは埋没後に掘られた不規則なピットが検出されました。



南北の中堀



箱薬研堀



テラスに掘られた不規則なピット

③東西の中堀を「T」字形に掘り下げたところ、箱薬研堀が検出されました。こちらも堀底に畝はなく、ほぼ平滑で深さは約 3mを測りました。また、堀底から約 1.5mの付近には、後から法面を開削して構築された幅 1mほどのテラスがありましたが、テラスは内側の法面にのみ存在し、外側の法面にはありませんでした。このテラスは②のテラスとは高さや幅が異なることから、同一のものではないと思われます。堀はやはりテラスが見えなくなる所まで人為的に埋め戻されており、堀底直上からは「ウズマキかわらけ」が出土しました。



東西の中堀



内側法面のテラス



ウズマキかわらけ

4. その他

(1)城山神社

現在、本郭には城山神社が鎮座しています。

滝の城落城後は愛宕神社が祀られていましたが、明治41年に村内の天神・熊野・八幡社を合祀し、城跡の名をとって「城山神社」となりました。



(2)霧吹き井戸跡

滝の城跡西側の七曲坂を下りきった所に残る井戸跡です。

昔、井戸に竜が住んでいて、たびたび悪さをしたことから、村人たちは竜を退治するために、柳瀬川の対岸に舞台を作り、お祭り騒ぎをして竜をおびき出し、弓で射たという伝説があり、弘化3年(1846)建立の大峯大権現と刻まれた石塔があります。



(3)血の出る松

滝の城跡西側の七曲坂の途中には、傷をつけると赤色の樹液が出るとされる大きな黒松が立っていました。その赤色から、落城した際に討ち死した城兵の血ではないかという言い伝えがあります。

昭和47年に松は枯れて伐採されましたが、跡地には「血の出る松の跡」の碑が立っています。



(4)金津の滝

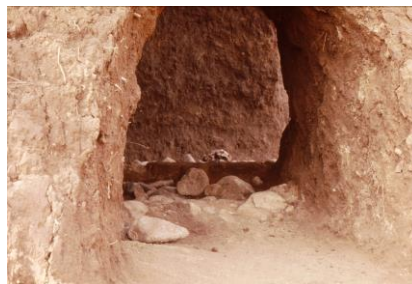
出郭と城外を画す小谷に、かつて「金津の滝」という滝がありました。この滝が「滝の城」の名の由来になったと伝わります。



(5)滝の城横穴墓群

本郭の南斜面が崩れた際に擁壁補強工事を行ったところ、横穴が出現して、内部から人骨や副葬品が出土しました。

滝の城が築城される800年前の古墳時代末の横穴墓です。



【交通アクセス】

- ◆JR武蔵野線「東所沢駅」下車 徒歩約25分
- ◆西武池袋線/新宿線「所沢駅」東口から
西武バス(志木駅南口行き)「城」バス停下車すぐ
- ◆お車でお越しの際は、城跡の南側の「滝の城址公園」
駐車場をご利用下さい。

【お問い合わせ】

〒359-8501

所沢市並木一丁目1番地の1
所沢市教育委員会 文化財保護課
TEL 04-2998-9253
発行日/平成30年3月30日

